



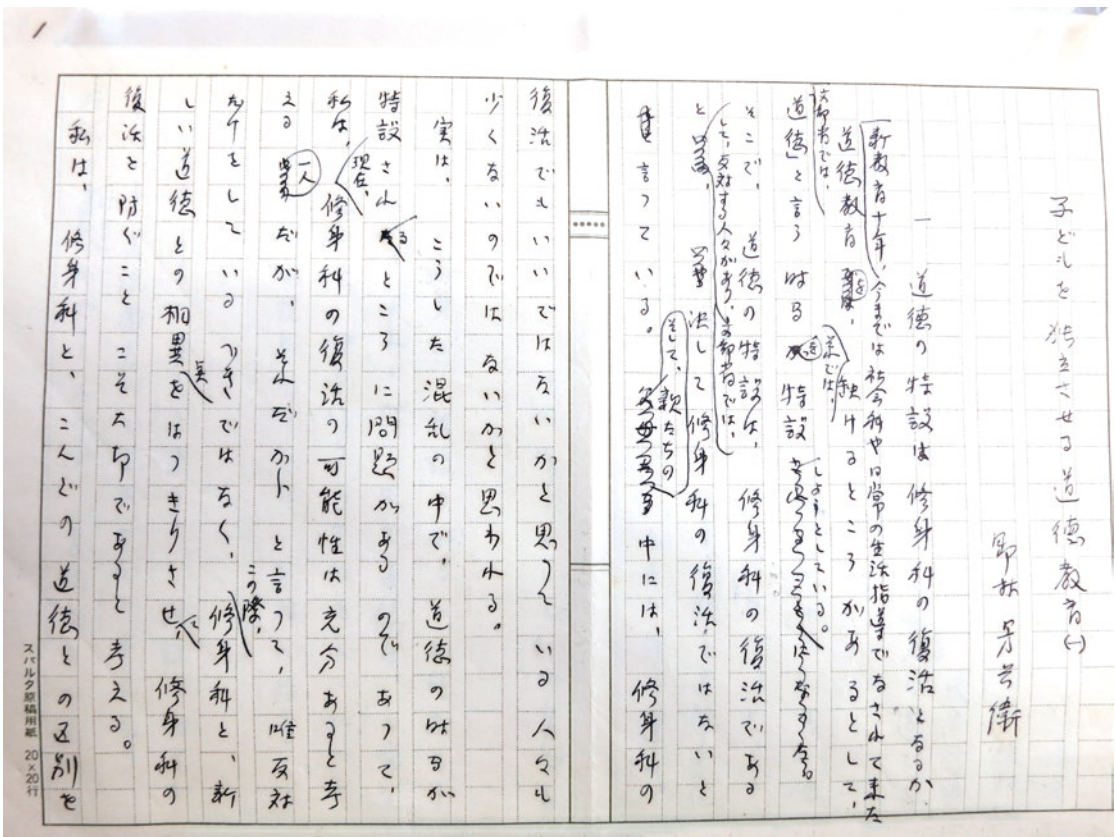
資料紹介・野村芳兵衛〔未完の手書き原稿〕子どもを独立させる道德教育（一）

著者	山住 勝広
雑誌名	関西大学学校教育学論集
巻	6
ページ	45-46
発行年	2016-03-19
その他のタイトル	Research material・Yoshibee Nomura [Unpublished Manuscript] Moral education for children to make them independent (1)
URL	http://hdl.handle.net/10112/10152

野村 芳兵衛

〔未完の手書き原稿〕

子どもを独立させる道徳教育（一）



原稿の1枚目（岐阜県歴史資料館所蔵）

【資料紹介】

ここに紹介するのは、日本の生活教育運動を代表する教育実践家・思想家のひとりである野村芳兵衛（1896-1982）の未完の手書き原稿「子どもを独立させる道徳教育（一）」である。岐阜

県歴史資料館所蔵の「野村芳兵衛文書」に収められているこの原稿は、400字詰原稿用紙に約2枚半の分量のものであり、執筆の年月は不詳である。

しかし、以下に掲載する原稿の内容から明らかな

ように、1958（昭和33）年の学習指導要領改訂時に新設された「道徳の時間」、いわゆる特設道徳の開始を直接の検討対象にしていることからして、1958年前後に書かれたものであることはまちがいない。このように見ることのできる未完の手書き原稿「子どもを独立させる道徳教育（一）」は、戦前の「修身科」時代から一貫して生活教育の思想と実践にもとづきながら、独自の道徳教育構想を発展させてきた野村が、戦後の特設道徳に対してとった彼ならではの非常に明快な主張を知ることができるという点で、未完のまま終わっていることは大変惜しまれるが、きわめて貴重な史料であるといえるものだろう。とくに、学校における道徳の教科化を目前に控えた今日、この原稿に込められた野村の特設道徳に対する生産的で建設的な批判に触れることは、すぐれて示唆的だといってよい。

なお、掲載にさいしては、原稿にあった旧字体は新字体にあらためた。

ここで掲載した原稿の写真、そして本誌本号での以下のような原稿の全文活字化にあたり、資料の閲覧と使用にご協力・ご承諾をいただいた岐阜県歴史資料館に厚くお礼申し上げる次第である。

（山住 勝広）

子どもを独立させる道徳教育（一）

野村 芳兵衛

一 道徳の特設は修身科の復活となるか

新教育十年、今までは社会科や日常の生活指導でなされて来た道徳教育を、それでは、欠けるところがあるとして、文部省では、「道徳」と言う時間を特設しようとしている。そこで、道徳の特設は、修身科の復活であるとして、反対する人々があり、文部省では、決して修身科の復活ではないと言っている。そして、親たちの中には、修身科の復活でもいいではないかと思っている人々も少なくないのではないかと思われる。

実は、こうした混乱の中で、道徳の時間が特設されるところに問題があるのであって、私は、

現在、修身科の復活の可能性は充分あると考える一人だが、それだからと言って、唯反対だけをしているべきではなく、この際、修身科と、新しい道徳との相異点をはっきりさせて、修身科の復活を防ぐことこそ大切であると考えます。

私は、修身科と、こんどの道徳との区別を次ぎのように考えている。

- (1) めあてがはっきり異う。修身のめあては、臣民の道であり、それは絶対服従の封建道徳であるが、民主道徳は、民主の道であり、これは、相互信頼と連帯責任による協力の道である。
 - (2) 方法がはっきり異う。修身のやり方は、他人に関係なく、自分をつつしめばよいのであるが、民主道徳は、相互信頼と連帯責任による協力なのだから、お互に係を選び、約束を作って、仲間作りをして行かねばならぬ。
- 従って、修身は、特設の時間にお説教をするだけでもやれるが、民主道徳は、日常生活を通して、仲間作りの生活をして行かない限り、お説教だけでは、絶対に指導できない。

以上のように考えて来ると、特設の時間がなから道徳教育ができぬのだと考えたり、特設の時間ができたから、道徳教育が徹底すると考えたりすることが、大きな誤りであることがわかるはずだ。そして、そういう考え方をしている人は、封建道徳と民主道徳の区別がわからない人であり、民主的自覚のない人たちであると考えるべき。

この場合、民主的自覚のできていない人たちは、これを分けてみると、凡そ三つの群れに入れることができる。

一つの群れは、民主的自覚を持とうとしないどころか、封建制度を守って、他を支配したいと考え、積極的に、修身科を復活させようとしている人たちである。